

## 外在主義・ドライ地球・推論主義

島村 修平(Shuhei SHIMAMURA)

ピッツバーグ大学哲学科

---

内容外在主義は、私たちの心的内容は部分的には私たちを取り巻く環境に応じて決定されるというテーゼである。このテーゼは、一見、私たちは自身の思考を単なる内省に基づいて——すなわち、環境を経験的に探究することなく——知ることができるという考えと緊張関係にある。この緊張関係を厳密に分節化する試みの一つとして、McKinsey (1991) “Anti-Individualism and Privileged Access,” *Analysis*, 51: 9–16 によって追究され始めた背理法に基づく議論（以下、「アームチェア論法」と呼ぶ）がある。本発表の目的は、この議論においてこれまで無批判に受け入れられてきた暗黙の前提を明らかにし、それを拒否する可能性を示すことで、アームチェア論法に対する新しい応答の可能性を示唆することにある。

本発表ではまず、アームチェア論法をその最も説得的な形において提示することを試みる。アームチェア論法をどう定式化すべきかということは、それ自体、一つの論争を引き起こしてきた。ここでは、その最も強力な定式化として、ドライ地球の思考実験に訴えるタイプの背理法を再構成する。ドライ地球の思考実験とは、内容外在主義者が好んで依拠するパトナムによる双子地球の思考実験の一変種である。このためアームチェア論者は、外在主義者は、双子地球の思考実験を自身の立場の根拠として受け入れる限り、自己矛盾に陥ることなく、上の背理法を拒否することはできない、と主張することができる。

次に応募者は、このタイプのアームチェア論法が、その決定的なステップにおいて、ある意味論的な前提に訴えていることを指摘する。その意味論的前提とは、「水」を含む一般名は、指示対象を欠く場合には無意味となるというものである。いま、表現の意味をその表現の指示対象や、指示対象に基づく何らかの概念（例えば、フレーゲ的な意義）によって説明する理論を、指示的な意味の理論と総称するとしよう。指示的な意味の理論を採用し、上の前提を回避することは困難である。

そこで応募者は、代替案として、表現の意味をその表現の使用に関わる概念に基づいて説明する理論、その中でもとくに推論主義と呼ばれる立場に注目する。応募者はまず、推論主義は、従来のプラグマティックな意味論とは異なり、本質的に外在主義的な意味論であることを示す。その上で、推論主義者は、上述した前提を拒否し、「水」はドライ地球上では指示対象を欠くにもかかわらず有意味であるということを確認することができる。これにより内容外在主義者は、推論主義を採用する限りにおいて、アームチェア論法を回避することが可能となる。